

2024年の白露(はくろ)は9月7日。

二十四節気では、夏の暑さが落ち着く「処暑(しよしよ)」の次に白露を迎え、昼夜の長さがほぼ同じになる「秋分」へと移り変わります。

白露もこぼさぬ萩のうねり哉(しらつゆもこぼさぬはぎのうねりかな) 松尾芭蕉

萩がこぼすものは萩の花ときまっているが、その花はもちろん、花に置いた白露さえこぼすことなく揺らめいていることだ、という意。

元禄6年秋。杉風(杉山杉風)の別邸採茶庵の邸に秋萩を移植した際に芭蕉が詠んだ句杉風を称える挨拶句であろうと言われています。



白露の時期には「中秋の名月」や「彼岸の入り」など、季節の行事があります。

中秋の名月とは、旧暦8月15日の夜空に昇る月のこと。空気が澄んでいる秋は、夜の月が美しく見えます。そのため人々は古来より、中秋の名月に秋の収穫物を供えて豊作を感謝し、健康を願ってきました。月に似た丸い形の団子を積み上げるのは収穫の感謝や健康長寿の願いを天へ届けるためです。

供えた団子を食べることで月の力を得て、健康長寿の願いが叶うと考えていました。

お供えするものは地域によって違いますが、まるい団子を三方(さんぼう)という神様へのお供えをのせる台の上に15個積み上げます。月見団子の意味は諸説ありますが、丸い形が満月を連想し、月に収穫の感謝を表していると言われています。

他には秋に収穫した里芋などの野菜や果物、ススキを飾ります。

ススキは稲穂に似た姿から、月の神様が宿るとされています。



「彼岸の入り」とは、秋の彼岸の初日のことです。

彼岸では、墓参りをしたりお供ものをしたりして先祖を供養します。

彼岸は春と秋の年2回あり、秋の彼岸は秋分の日を中心とした7日間とされています。

秋の彼岸に、餅をあんこで包んだ「おはぎ」をお供えする人は多いでしょう。

おはぎは、夏から秋にかけて開花する萩の花を模して、俵形に作られます。

また、あんこには粒あんを使用することも特徴です。



<重陽の節句>

9月9日は五節句の1つである「重陽の節句」です。

最近はあまりなじみがない節句ですが、旧暦を使用していた頃までは五節句を締めくくる最後の行事として盛んに行われていました。旧暦の9月9日は現在の10月中旬ごろあたり、菊の花が見ごろを迎える時期です。

「菊の節句」とも呼ばれ菊酒を飲んだり、栗ご飯を食べたりして無病息災や長寿を願います。

菊酒とは菊の花を漬け込んで香りに移した日本酒のこと。

白露の時期は収穫を祈る秋祭りなど、全国各地で神事があります。

「岸和田だんじり祭」(大阪府)は、毎年その勇ましい様子がニュースにもなる秋祭り。最大重量4tを超える「だんじり」を400~1000人の男衆が2本の綱で曳く、勇壮無双な姿は迫力満点。特に、フルスピードで曳行コースを曲がる「やりまわし」は、祭り一番の見所。だんじりは唐破風の大屋根・小屋根が二段でコマが四つの山車(だし)のことで、西日本地域特有の呼称です。

約300年の歴史と伝統を誇る岸和田だんじり祭も、元々は五穀豊穡を祈る稻荷祭がその始まりだと言われています。



だんじりの魅力は大迫力のやりまわしだけではなくありません。

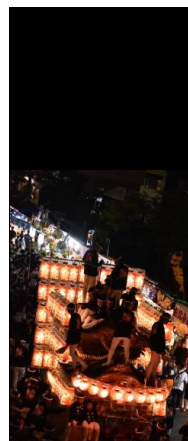
①だんじりの彫り物は、歌舞伎・人形浄瑠璃・講談などでもとり上げられているような、歴史的な出来事や物語がモチーフになっています。特に「太閤記」「難波戦記」などが人気の高い彫り物です。漆塗りや金箔などを使わず檜の木目を活かした、人物、馬、霊獣、そして花鳥ものから唐草文様など、実にさまざまな彫刻を目にすることができます。

②「灯入れ曳行(えいこう)」

夜になると、200個以上の提灯を飾り付けただんじりが子ども達に曳かれます。

昼の激しいだんじりとは異なり、灯入れ曳行は優美さと静寂が魅力です。

③「だんじり囃子」は、だんじりの上で篠笛・小太鼓・鉦(かね)・大太鼓で囃す音楽のことで、リズムは、だんじりの動きに合わせて変わります。だんじりが猛スピードで走る時のリズムは「きざみ」、やりまわしで足並みを揃えるときの少しスピードを抑えたりリズムは「半刻み」など、曳き方によってリズムが変わります。



<だんじりの彫り物>

<灯入れ曳行>